

題目:「ゲノム編集魚ベンチャー、リージョナルフィッシュ社の挑戦」

講師:リージョナルフィッシュ株式会社 代表取締役社長 梅川忠典氏

日時:2023年4月5日(水) 18時-20時

(1)創業背景

- ・創業の背景としての問題意識は、前職のファンドで仕事をしていて、やはり強いコアテクノロジーが企業力には必要であると認識した事。そこで、アカデミアからの研究成果に注目し、京大産学連携部門や京大VCと協議を重ねながら、ゲノム編集魚の京大研究者と出会い、意気投合して創業に至った。
- ・産業的には、日本の漁業と養殖は長期低落傾向にある。同時に世界的に、人口増加に伴うタンパク質不足の観点からも、タンパク質製造の効率が極めて悪い動物肉を改善することが必要で、魚の効率をさらに上げる事が重要。
- ・京大農学部において、魚のゲノム編集によって飼料の量が4割少なく育てる事が可能となる。特に、ゲノム編集は、従来の品種改良よりも正確性が高く予測可能であることが優れている点である。
- ・リージョナルフィッシュは地魚のことである。

(2)事業

- ・役割分担としては、ゲノム編集を京大メンバーが、養殖を近畿大メンバーが担当。
- ・これまでの資金調達は20億円以上で、VC以外にも多数の企業が出資してくれている。
- ・社員は40人強で、約半数が博士。
- ・まず鯛とふぐで開始している。「22世紀鯛」、「22世紀ふぐ」とブランディングにも力を入れている。
- ・ゲノム編集食に対する世の中の拒絶感はマイナーなものとなってきており、市場は立ち上がりつつある。
- ・ビジネスモデルとしては、自社が稚魚まで育て、多数の養殖パートナーに成魚まで育ててもらうスキーム。

(3)今後の予定

- ・今後の量産化と商品の特徴強化が鍵。味以外に、DHAなどの栄養強化などの特性と品種の拡大を企図している。
- ・さらに海外展開も含め、産業としての成長を狙っている。

(4)Q&A

- ・人材採用の苦勞:技術系はないが、ビジネス系で苦勞はある。ビジョンへの共感が重要。

- ・戦後、日本人のたんぱく質供給のために潜水艦探査のソナーを魚群探知に転換したベンチャーが量的に大いに貢献した。ゲノム編集は、それにおいしさという新たな質も提供できる。
- ・大企業のシニアの経験の活用： 会社運営の機能面(人事、経理、総務など)であり得る。

以上